# 「主体的な学び」

前橋市立おおご幼稚園
園長　三好 玲子

６年前、初めて幼稚園に勤務し、私は義務教育と幼児教育はどこが違うのだろうと興味をもって日々の園での様子を観察していました。

年少のA児がブランコ近くで、他の子どもたちがブランコで遊んでいる様子をずっと見つめていました。空いているブランコはなく、A児は、自分も乗りたいのに、どうしたらよいのか分からなくて困っている様子でした。その様子を見ていた年少担任は、A児に「どうしたの？」と声をかけました。A児はブランコに乗る子どもたちの方を指さします。すると担任は「Aちゃんはどうしたいの？」と尋ねます。A児が「乗りたい。」と答えると担任は「そうか、どうすればいいかねえ。」と言ってから、「じゃあ、先生がここで見ててあげるから、『私も乗りたいよ。』って言ってみる？」と提案しました。するとA児はうなずき、担任の援助を受けながら小さな声で「私も乗りたい。」と伝えることができました。その後、うれしそうにブランコに乗っていた姿を記憶しています。

先日、横浜創英中学・高校の工藤勇一校長のインタビュー記事※を見ました。子どものやる気を引き出し、子どもが主体的に動くようになる「3つの言葉」として、

１「どうした？」（ただシンプルに現状を聞く。）

２「このあとはどうしたい？」（子どもの意思確認をする。）

３「僕は（私は）何をしたらいい？」（君のことを思っているというメッセージを伝える。）

を紹介していました。子どもたちの自己決定を促し「自律型」に変えていくことがとても重要であると記されていました。この記事を読んだときに、6年前のブランコでの出来事を思い出し、共通しているものを感じました。

幼児教育では、子どもたちの発達に合わせて経験させたいことを担任が考えて環境を整え、支援を工夫しています。「遊び」は、自分で見付けた課題を自分なりの方法で実現することのできる活動です。子どもにとって自己選択、自己決定、自己実現の場面がたくさんあります。遊びに夢中になっている姿は、子どもが自信をもって安心して自己発揮している姿です。

一方、小・中学校の授業では、担任はまず、児童・生徒の実態を把握して一人一人の学習の定着を考えます。主体的に学習に取り組むことができるように、教材や支援を工夫して授業をつくっています。例えば、環境・場・ICT 機器等の設定、課題の明確さ、必要感のある課題、体験的活動、学習状況の把握・学習の見通し、選択・自己決定の場面、学習方法の定着、安心できる集団の雰囲気等々、様々な手立ての工夫をしています。

幼児教育、小学校、中学校、・・・と常に、最も大切にしているのは子どもたちの主体的に学ぶ姿です。子どもたちが安心して、自分のよさを十分発揮しながら主体的に学べるよう、私たち大人は今後も努力をしていきたいと思います。

※〈参考・引用文献〉加藤紀子．“子どもが主体的に動くようになる「３つの言葉」横浜創英・工藤勇一校長インタビュー〈前編〉”．ReseMom．　https//resemom.jp/article/2020/09/16/58137.html　（参照 2022-01-07）